

道徳部会 研究の構想（案）

平成30年度～

I 研究主題

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。

－主として自分自身に関すること－

II 主題設定の趣旨

日本社会はグローバル化や情報化の進展、少子高齢化等、社会の急激な変化がもたらす様々な影響により、将来の予測が困難な時代を迎えている。このような社会で生きて働く知識や力を育むために、「何を学ぶか」に加え、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」といった学びの質の転換が望まれている。そして、その学びの過程となる「主体的・対話的で深い学び」をどのように実現するかが課題となる。

道徳教育においては、「特別の教科道徳」が平成31年度に全面実施となる。他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を育むため、答えが一つではない道徳的な課題を一人一人の生徒が自分自身の問題として捉え、向き合う「考える道徳」「議論する道徳」へと転換を図り、「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指すことが大切であると考え。

そこで、これまでの道徳の授業を改めて見直し、「主体的・対話的で深い学び」のある授業にするには、具体的にどのような手立てを講じたらよいかについて研究することが必要であると考えた。改善の視点を「指導する教師が道徳的諸価値をどれだけ深く理解し、授業に臨むか」「生徒が学習課題を自分の問題として捉え、それを多面的・多角的に考えることを通して、人間としての生き方について考えるための手立ては何か」とし、この視点を軸として授業改善に取り組んでいきたい。

本県の生徒の実態を全国学力・学習状況調査の生徒質問紙から見てみると、将来の夢や目標をもっている生徒が全国平均に比べて少ないことが浮き彫りになっている。このような実態から、まずは自分自身を大切に思う気持ちを育てることから始めたいと考え、「主として自分自身に関すること」を副題に設定した。自分自身の内面を見つめることで、真摯に自己と向き合い、自分との関わりで改めて道徳的価値を捉え、一個のかけがえのない人格として自己理解を深め、自己や社会の未来に夢や希望がもてるようにしていきたい。

本研究は3か年を1サイクルとして研究を進めている。同じ内容項目で3年間の研究を行うことで、指導する教師の道徳的価値理解を深めていきたいという意図がある。そのような深い価値理解を基本として、年次ごとに重点研究内容を設定し、焦点化された研究を推進していきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てるために、実践的研究を進める。

2 研究内容

(1) 年次ごとの重点研究内容

平成30年度…道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫

平成31年度…互いに関わり合って道徳的価値の理解を深め合う学習活動の工夫

平成32年度…自らの成長を実感したり、課題や目標を見付けたりする指導の工夫

(2) 道徳の授業を構想するための方策

(3) 道徳の授業に生かす指導方法の工夫

道徳部会 平成30年度研究計画（案）

I 研究主題

主として自分自身に関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳の授業はどうあればよいか。

－道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫－

II 主題について

平成30年度から、内容項目の四つの視点のうちの「A主として自分自身に関すること」を中心として、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てる道徳の授業について研究する。

これまでの研究では、付箋紙やホワイトボードを使用した言語活動を工夫したり、役割演技（ロールプレイ）等の体験活動やグループでの話し合い活動を取り入れたりするなど、学習活動の在り方や授業展開の工夫を中心に実践を重ねてきた。そして、これらの活動は、生徒の主体性を引き出し、全員が何らかの形で自分の考えを表現したり、他者の多様な考えに触れたりすることに有効であることが解明された。しかし、実際には、多様な考えに触れる機会を得ながらも、自分の考えを述べたり、相手の考えを聞いたりする言語活動を位置付けただけの授業も見られた。このことから、自分の考えと他者の意見との共通点、相違点を確かめながら、自らの考えを広げ深める「対話的な学び」の実現という課題が明らかになった。様々な学習活動を生かしながら道徳の授業をより対話的で深い学びへと展開させるためには、綿密な教材の分析や考える必然性や切実感のある、より吟味された発問について、改めて検討する必要がある。

そこで今年度は、「道徳的諸価値の理解を深める発問の工夫」に焦点を当てて研究を進める。授業を行う際には、主題となる内容項目について教師自身が理解を深め、ねらいに深く関わる中心的な発問を吟味し、次にそれを生かすためにその前後の発問を考えていきたい。生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性、切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問等を工夫し、「主体的・対話的で深い学び」のある道徳の授業を目指し、実践的研究を推進していきたい。

III 研究内容とその視点

内容項目の四つの視点のうちの「A主として自分自身に関すること」を中心とした道徳の授業において、どのような発問を行えば、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に捉える考えを引き出し、道徳的価値や人間としての生き方について理解を深める授業となるのかを実践を通して明らかにする。

効果的な発問を行うには、本時のねらいを明確にしておくことや教材の分析に基づいた発問構成の吟味等、全体的な授業構想が大切な視点となる。また効果的な発問へと導くための様々な指導方法の工夫も同様に大切な視点となる。このような視点に基づき研究実践を行い、次年度以降の研究につなげていきたい。

1 道徳の授業を構想するための方策

(1) 道徳の授業における明確なねらいの設定

・具体性と簡潔性を兼ね備えた「ねらい」を設定する。

一例「(A) 晴れ晴れとした顔で職場を去っていく元さんを通して、(B) 集団の一員としての自覚をもってきまりやルールを遵守しようとする (C) 道徳的実践意欲を育てる。」

(A) では教材の活用を簡潔に表記し、(B) では内容項目から焦点化したものを的確に示し、(C) には道徳的判断力、道徳的心情、道徳的実践意欲と態度を考慮して示す。

- ・内容項目の何に重点を置くのかを明確にする。〔自主、自律、自由と責任〕等、複数の要素で一つの項目が構成されている場合は、生徒の実態と照らし合わせ、使用する教材の分析を基にして、「どの部分を深めるか」を考え、重点を置くべき要素を明確にする。

(2) 発問の吟味

- ・授業者が教材を吟味し、道徳的価値を学習指導要領解説と照らし合わせながら、より深く理解する。
- ・道徳的価値の理解を深めるのにふさわしい中心場面を設定し、中心的な発問を工夫する。
- ・中心的な発問からどのような生徒の発言が予想されるのかを明確にする。
- ・生徒の思考の過程を予想し、中心的な発問を生かすための前後の発問を設定する。
- ・中心的な発問に対する考えを、より深めるための問い返しを工夫する。
- ・発問を設定する際には、生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性、切実感のある発問、自由な思考を促す発問、物事を多面的・多角的に考えさせる発問等となるよう工夫する。

2 道徳の授業に生かす指導方法の工夫

(1) 話し合いの工夫

- ・生徒一人一人の道徳的なものの見方や考え方を深めていくために、考えを出し合う、比較する、まとめるなどの目的を明確にし、効果的に話し合いが行われるよう工夫する。
- ・話し合いが表面的、形式的なものに終始しないように留意する。

(2) 書く活動の工夫

- ・道徳的価値に関わる自分の考え方や感じ方を整理し文章化することで、自分自身を客観的に認識し、道徳的価値に関する思いや課題を深め、新たな思いや願いを抱いていくことをねらいとして書く活動を効果的に取り入れる。
- ・書く活動を取り入れ、生徒の学習を継続的に深めたり、生徒の成長の記録として評価に生かしたりする。

(3) 動作化や役割演技等の表現活動の工夫

- ・自分自身との関わりで多様な考え方や感じ方に気付き、道徳的価値について理解を深めることができるようにするために、動作化や役割演技、コミュニケーションを深める活動等の表現活動を取り入れる。

(4) 板書を生かす工夫

- ・生徒の考え方や感じ方の違いや多様さを対比的、構造的に示す工夫、中心部分を浮き立たせる工夫をする。
- ・ねらいに関わる生徒の発言はキーワードで簡潔に板書する。

IV 研究方法

- 1 研究主題を主体的に受け止め、各学校で日々の実践活動を通して主題の解明に努める。
- 2 各学校での実践資料や成果等を持ち寄り、各郡市、地区で研究を深める。
- 3 各郡市、地区ごとに研究の視点を明確にし、研究授業、研究協議を通して、指導法の実践的研究を進め、主題の解明に生かす。
- 4 各郡市、地区の研究結果を踏まえ、情報を交換し、次年度以降の研究に生かす。

